ベトナム、ある児童の人生の選択

佐藤　美智

2001年８月末、私は４度目のベトナム・ハノイ市に降り立った。今回は、昨年現地で収集した資料をもとに児童の家事労働者の実態を調査することが目的である。いつもの私のベトナムでの住居は、ハノイに留学していたときに暮らしていた貸し部屋である。しかし今回は、以前大家さん（お父さんＬ氏、お母さんＴさん）が一緒に住んでいた家の部屋は新しい住人（若い韓国人Ｄ夫妻）がいるということで、そこから徒歩２、３分ほど歩いたもう一つの貸家に滞在することになった。

空港に降り立ち、約１年ぶりのハノイに懐かしさを覚えながらタクシーに乗り込み、直接大家さんの家へ向かった。いつものように玄関先で挨拶をしている私達を、マッチ棒のように細い体で土色によく日焼けした少女がじっとみつめていた。彼女（Ｈちゃん）は、５日前にハノイに来たばかりでここに一緒に暮らしているのよ、と大家さんが紹介してくれた。年齢は13歳（ベトナムでは生まれた年を１歳と数えるので実際には12歳）であるが非常に幼くみえる。聞けば、彼女の出身地はハノイから南へ180kmほど行ったサムソンという北部の有名なビーチである。このサムソンの別荘で余暇中の大家さんが、夜、海辺を散歩しているときに彼女に出会った。そのとき、彼女はござを両手に抱えて浜辺の客を相手にマッサージをしていた。大家さんは、危険なのでうちに帰るよう説得したが、彼女は帰らなかった。

彼女の家族は、お父さん、お母さん、５子（彼女を含めて）であるが、父親には妻が２人いるという。家計は苦しく父親は日雇いの仕事で、母親は海辺で売り子をしており、そのため子供たちも学校には行かず皆働いている。大家さんは彼女を20歳まで預かるつもりで、彼女の意思を確かめ両親と相談しハノイへ連れてきた。彼女の両親に幾らかのお金を渡そうとしたが一切受け取らなかった。しかしこの後わずか１ヶ月ほどで、もうハノイへは戻らないと言い、彼女は急に帰省してしまう。

ハノイでの彼女の生活は、お母さんＴさんの家事を手伝ったり、いっしょに散歩したり、勉強をしたりしてそのほとんどの時間を家で過ごしていた。彼女は、小学３年生でドロップアウトしておりほとんど読み書きができない。私も時々、彼女に勉強を教えたり、遊びに連れだしたりしていた。私がお母さんＴさんに「学校に行かせないの」とたずねたら、「年齢的に今から復学するのは難しく特別な学校に行かなければならないの、しばらくは私が教えるからミチも手伝ってね」と言われた。

彼女はしばらくするとサムソンへ帰りたいとよく口にするようになり、大家さん夫妻が私用で10日間ほどホーチミン市へ出かけているときには、涙さえ流して毎日私と韓国人D夫妻のところに切実に訴えてきた。自分をバイクに乗せてサムソンまで連れて行って欲しい、もしくはバス代を貸して欲しいと。「何故帰りたいの」と聞くと、「ハノイの生活は、自由もなく、つまらないし寂しい。サムソンへ帰れば家族や友達がいて楽しいし、私の家では仕事がたくさんあるから。」「学校へは行きたくないの？」と聞くと、「わからない。でも、今はみんなと働くほうが好き、だから帰りたい」といった。私と韓国人D夫妻の意見は一致しており、私達の一存で彼女をサムソンへ帰すわけにはいかないと思い、もうすぐ大家さんが帰ってくるから待っていようと毎日説得した。その後、仕事のため、先にお父さんL氏が帰ってくるとすぐに話をして、お母さんTさんの帰りを待たずに彼女は帰っていった。

お母さんTさんは、「何の不自由もない暮らしなのになぜ帰ってしまったの、私には理解できないわ」と寂しそうに言った。そして、「私は、また子どもを引き取って育てたいと思っている。お父さんL氏は仕事が忙しく出張も多いし、私は寂しいの」と話してくれた。大家さんには２人の自立した子どもがいるが次男はポーランドにおり、長男は近くに住んでいて結婚もしているが、事情があって子どもができない。お父さんはもう退職したが、以前はベトナムの水力発電公社の副頭取であり、ニューヨークタイム誌にも取り上げられたほどの博士である。現在は、ハノイ工科大学で講義をうけもっている。

ビア・ホイ（ベトナムの生ビールで味は薄いが値段が安い）を飲みながら韓国人D夫妻は私に「ここにいたほうが将来のために良いのに……彼女はまだ何もわかっていない」と言った。果たしてHちゃんの選択は正しかったのであろうか。確かに彼女は裕福な生活を得るチャンスを逃してしまったかもしれない。しかし、すべての人にとって裕福な生活が必ずしも幸福であるとは限らない。以前、旧正月に番地もない土間にかまど暮らしの貧しい農村にある友人の家に招待されたことがあった。そこには、貧しくとも家族で助け合いながら生きている姿があった。友人のおじさんが「このとおりうちは貧しいが幸せなんだ」と帰り際に私に言った言葉を思い出した。彼女は裕福な生活や将来の安定よりも家族や友人と一緒にいることを望み、それを選択した。彼女が貧しさについて考慮したのかはわからないが彼女が想像していた都市での生活とは少し違っていたようだ。

サムソンでの彼女は、友人や仲間同士で楽しく仕事をしながら気ままに一日を過ごすことで自由を感じ、家族のために働くことで自分が必要とされているという存在価値を見出していた。また、そこに自尊心があったのだろうと思う。ハノイでの生活において、それに代わるもの、もしくはそれ以上のものを見つけることができなかったのではないだろうか。彼女がサムソンに帰る３、４日前に彼女のお父さんから電話があったが、ちょうど彼女は外出していてお父さんと話をすることができなかった。このとき、帰りたいという彼女の気持ちがさらに強くなったのは確かである。この彼女

の選択は彼女が幼いからもしくは価値観が違うからといえばそうなのだろう。しかし、物のある幸せになれてしまった私は、物のない幸せを軽視して忘れてしまっていたかもしれない。物のある幸せよりも物のない幸せのほうに、より強い絆が存在するのではないだろうかと感じた。

今回の彼女の選択は、すべてが彼女自身の意思を反映したものであった。しかし、都市部で働く子ども達や私のアンケートに協力してもらった子ども達のほとんどは、自分の意思とは全く関係のない仕事をしていた。児童労働は、年少であるほどインフォーマル化し児童自身の選択の余地はほとんどない。児童労働問題を考えるとき、労働そのものを排除するのみではなく、子ども達の意思を反映させ、子ども達自身で仕事を選択できるような機会と環境をつくりサポートしていくことも重要なのではないかと思う。

写真　ハノイ市、ホアンキエム地区民のボランティアによるストリート・チルドレンの支援集会（1998 年 10 月）